

令和元年6月16日現在

機関番号：34416

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02287

研究課題名(和文) 中英語頭韻詩と脚韻詩の対立・融合・変容発達の過程を探る：韻律と意味の観点から

研究課題名(英文) Exploring the Process of Confrontation, Blending, and Transformational Development of Middle English Alliterative Verse and Iambic Rhymed Verse: From the Perspective of Metre and Meaning

研究代表者

井上 典子 (Inoue, Noriko)

関西大学・外国語学部・教授

研究者番号：70708354

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：14世紀のイングランドは、英詩の歴史上、2つの伝統的な詩形、脚韻詩と頭韻詩が互いに接近度を高め、影響を与えあった、つまり対立、融合、変容発達していった時代である。大陸から導入、発達したのが脚韻詩である一方、古英語詩の伝統を引き継ぐ、脚韻詩とは多くの点で正反対の韻律を持つのが頭韻詩である。本研究においては、特に韻律と詩の意味との関係(音やリズムが詩の意味と解釈に与える効果)に着目し、頭韻、脚韻詩が、お互いに独立した個々の伝統ではなく、相互に学び合って、それぞれの詩形・韻律の表現可能性を広げ、深め、複雑・複合的に「成長」し、それぞれの固有性を作り上げていく過程の一端を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究成果の学術的意義として三つ挙げる。いまだ未知の部分が多い非脚韻頭韻長行詩(脚韻を用いない頭韻詩)の韻律構造について新たな発見・知見を提案することで頭韻詩研究に大きく貢献した。脚韻、頭韻詩人は、共通して自分たちの選んだ韻律規則に従うために、変化途上にある英語の柔軟性を活用し、さらには互いの伝統を積極的かつ果敢に取り入れ、それぞれの韻律・詩形に融合、発達させていたこと、そのことは意味生成にも深く関わっていることを論証できた。中英語詩全体をより正確に理解、評価するための新しい、かつ重要な視点を提示することができた。

研究成果の概要(英文)：In the 14th century England, two traditional poetic meters - those of iambic rhymed verse and alliterative verse - coexisted, being influenced by each another. This was also the period of confrontation, blending, and transformational development of the two competing metres. While iambic verse was introduced from the European continent and then evolved in England, alliterative verse was characterized by its close association with the OE alliterative verse and by its metrical features that were almost opposite to those of iambic verse.

In this research project we focused on the relationship between metre and meaning and attempted to clarify part of the process in which the two traditions influenced and learned from each other (as opposed to adhering to two independent and separate traditions), expanded and deepened the possibilities of expression through the use of their poetic forms and metres, and 'grew' intricately as well as multiply to create their own identity.

研究分野：中英語頭韻詩

キーワード：中世英文学 韻律 脚韻詩 頭韻詩 中英語詩 定型句 前半行 後半行

## 1. 研究開始当初の背景

14世紀は中世英文学の興隆期と見なされることが多い。この時代、多くの分野においてヨーロッパ大陸から多大な影響が見られる一方、英語の地位が飛躍的に向上し、国粹主義が高まった。またこの時期は、英詩の歴史上、2つの伝統的な詩形、脚韻詩と頭韻詩が互いに接近度を高め、影響を与えあつた、つまり対立、融合、変容発達していった時代である。大陸から導入、発達した脚韻詩を代表する詩人としてチョーサー、一方、多くの意味で脚韻詩とは正反対の韻律構造を持つ頭韻詩では『ガウエイン』詩人が上げられる。「英詩の父」と呼ばれるチョーサーを筆頭に多くの詩人が選択した脚韻詩韻律の研究と比較すると、同時代の頭韻詩研究は、まだまだ未知の分野であった。しかし、1990年代から研究者の間で頭韻詩韻律に対する関心が高まり、過去20年間で頭韻詩研究は飛躍的に進展した。そのような背景に基づき、本研究においては、特に韻律と意味の問題に着目し、頭韻、脚韻詩が、相互に学び合つて、それぞれの詩型・韻律を広げ、深め、複雑・複合的に「成長」し、それぞれの固有性を作り上げていく過程の一端を解明したいと考えるに至つた。

今まで詩形・韻律と詩の意味との関係は、個々の詩や詩人、あるいは頭韻詩や脚韻詩といったように個別に論じられることが多かった問題であった(例えば Borroff 1962, Barney 1993)。頭韻詩の韻律研究が大きく進展してきたことで、脚韻詩と頭韻詩の二つの伝統の韻律を比較し、それを頭韻詩と脚韻詩の対立・融合・変容発達というダイナミックな関係の中で再検討することによって、中英語詩全体をより正確に理解、評価することができると思つた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的として二つ挙げる。

1) 第一の目的は、非脚韻頭韻長行の頭韻詩と脚韻を含むスタンザ形式で書かれた頭韻詩との関係を明らかにすることによって、14世紀頭韻詩の全体像を理解することであった。14世紀後半の‘Alliterative Revival’「頭韻復興」に属する頭韻詩といえば脚韻を伴わない非脚韻頭韻長行詩のみ取り上げられることが多いが、この時期の頭韻詩には、脚韻やスタンザ形式を伴うものもあり、14世紀頭韻詩には多様性がある。頭韻を踏まない非脚韻頭韻長行の韻律構造がより明確になってきたことで、非脚韻頭韻長行の頭韻詩と脚韻を含むスタンザ形式で書かれた頭韻詩との関係にも新たな観点から考察が可能となつてきた。現在まで、頭韻詩研究者は非脚韻頭韻長行の韻律構造解明に取り組んできており、脚韻頭韻詩の韻律構造は全くの未知の研究分野である。従つて、本研究の第一の目的として、非脚韻頭韻長行の韻律構造解明および脚韻頭韻詩にも(脚韻以外の)韻律規則が存在するかどうか(例えば、脚韻が第一義的な規則で、頭韻は第二義的な規則、という韻律構築の優劣が観察できるのか)そしてもし存在するのであれば、それはこれまでに発見された非脚韻頭韻長行詩の韻律規則と何等かの共通性や類似性があるものなのか、という点を明らかにしていきたいと思つた。これによって、‘Alliterative Revival’「頭韻復興」に属する頭韻詩群の全体像がより明確となるはずであると思つた。

2) 本研究の第二の目的は、14世紀における頭韻詩と脚韻詩の関係を探ることであった。頭韻詩と脚韻詩の関係はこの時代の大きな謎とされてきた(Burrow 1971)。頭韻・脚韻詩人が作品の中で、他方の作品に直接言及またはコメントすることがほぼ皆無であるという事実から、二つの伝統はお互いの伝統に「無知」であつたように見える(Turville-Petre 1977)と論じられたことさえある。確かに、お互いの伝統を意識した詩人のコメントは数少ない。しかし、頭韻詩人・脚韻詩人の残した作品の詩形、内容から二つの伝統のダイナミックな関係が読み取れる。頭韻詩人は、脚韻詩に対抗しつつも、脚韻詩からさまざまなジャンルや詩的技巧を学び、それらを、ゲルマン的特徴を受け継ぐ頭韻詩に融合させることで、さらに複雑かつ奥行きのある頭韻詩へと変容させていった。一方、チョーサーやイーストミッドランドのテイルライムロマンスの詩人たちは、脚韻詩のフレームを起点としつつも、果敢にまた柔軟に頭韻詩の特徴を取り入れていっていてもいる。ロマンス系だけでなく、ゲルマン系の語を多用し、音節リズムだけでなく強勢リズムも取り入れ、更にはholt and heeth や as stille as stone のような頭韻句を積極的に活用していてもいる。フランスの脚韻詩を英語の伝統という土壌に入植させることで、一味違う作品を作り(育て)上げることに成功している。中尾(2010)、Nakao (2012)、Nakao (2018)は脚韻と頭韻の有機的な関係に注目し、論じている。

本研究では、特に韻律と意味の問題に着目することにより、頭韻、脚韻詩の両詩形がどのように対立し、融合し、変容・進化していったのか、そしてそれぞれがどのような固有性を作り上げていったのか、その一端を解明し、中英語詩全体をより正確に理解、評価するための一つの基準を提案することが目標であった。

### 3. 研究の方法

本研究では、第一段階として、研究代表者が、頭韻詩の韻律構造の明確化および頭韻詩における脚韻詩伝統の影響、研究分担者が、脚韻詩における頭韻詩伝統の影響の調査を行った。第二段階において、研究代表者が、頭韻詩の分析と脚韻詩の分析を統合し、中世の英語の韻律構造をより明確にし、頭韻詩と脚韻詩の対立、融合、そして変容発達していった過程を明らかにする予定であった。

### 4. 研究成果

研究代表者は、上記「研究の目的」で掲げた2点に貢献する成果を4本の論文において発表し、その成果を学会で報告した。一つ目の論文( )では、14世紀の頭韻詩と脚韻詩の合計10作品を取り上げ、形容詞・副詞の接尾辞である *-ly* (/i:l/) と *-lich* の観点から14世紀英詩における hiatus(母音連続)と elision(母音省略)の問題を検証した。結論として、脚韻・頭韻詩人たちは、自分たちの詩行を写字生・読者に明確に理解してもらうための手段として *-ly* と *-lich* という doublet forms を活用しており、このような共通した詩的技巧を用いていることから、脚韻詩と頭韻詩という二つの伝統の有機的關係が浮び上がってくると論じた。

二つ目の論文( )では、頭韻詩(非脚韻頭韻長行詩)の韻律構造、特に a-verse と呼ばれる前半行を支配する韻律規制を論じた。これまでの研究で、頭韻詩の韻律では、韻律強勢の数、非強勢音節の数と位置(行のどの位置に起こるか)だけでなく、非強勢音節の母音の質(完全母音か曖昧母音)も重要な役割を果たしていることが分かってきている。本論文では、頭韻詩人が詩作上、どのようなリズムを選択するか判断するには、これらの条件に加え、tempo という performance 的な要素も重要な役割を果たしているのではないかと論じた。

三つ目の論文( )では、脚韻を伴うスタンザ形式の頭韻詩、『夏の日曜(*Somer Soneday*)』および『ガウェイン』詩人の代表作『サー・ガウェインと緑の騎士(*Sir Gawain and the Green Knight*)』を例として取り上げ、14世紀頭韻詩人の詩的技巧・工夫を検討、比較すると同時に、いかに頭韻詩が脚韻詩と対立、融合を経て変容していったのか、その一端を検証した。

四つ目の論文( )では、研究代表者自身の非脚韻頭韻長行詩の韻律規則に関する仮説を提示した上で、新たに発見した証拠に基づき、自らの仮説の有効性を実証した。

研究代表者は、上記論文 と において、頭韻詩の韻律構造について新しい発見と知見を提示し、特に論文 と において、頭韻詩と脚韻詩の二つの伝統の有機的關係を論証することができたと考えている。

研究分担者は、チャーサーの詩をオクトシラビックの詩(*The Book of the Duchess, The House of Fame*)とデカシラビックの詩(*Troilus and Criseyde, The Canterbury Tales*)に二分し、それぞれにおける頭韻句の調査とその韻律分析を行った。頭韻句の多くは定型化したものであり、それは詩行の長短に拘わらず、脚韻の要請を満たすために詩行の後半行に表れる傾向が分かった。

また、チャーサーの脚韻詩において、脚韻構造に頭韻構造が組み合わさることで、脚韻詩はどのような意味論・語用論的な付加価値が加わるかを、認知言語学の立場から叙述・説明を試みた。口承的なロマンスにおいて、例えば1330-1340年頃にロンドンで制作されたと考えられている Auchinleck MS に含まれるロマンス作品(*Amis and Amiloun, Beues of Hamptoun, Sir Guy of Warwick* 等)には多くの頭韻を踏んだ定型句が使われている。チャーサーはこの頭韻句をただ一昔前の低落したものとして使用するのではなく、新たな文脈の中に溶解させ、新たな意味付けを試みていることを調査した。例えば、*bright in bourde, worly in wede* のような頭韻句を、詩行の後半行に脚韻を踏ませて使用したとしても、談話的にそのヒロインあるいはヒーローの実態化を伴わず、不完全燃焼に終わるなど、賞賛と批判とが微妙な緊張関係に置かれていることが分かった。このような使用を認知言語学というプロトタイプからのずらし、拡張事例化の一環として捉えた。

上記の脚韻構造に頭韻構造を組み合わせた使用の意味論・語用論的研究は、テイルライムロマンス(8音節4強勢のカプレットに6音節3強勢の尾韻)を詩型としてチャーサー自らが語る「トパス卿の話」を例に実証的な調査をし、著書、中尾(2018)で発表した。

2018年度の実績状況報告書で述べたように、研究代表者の家庭問題および前職校で予定していた一年間のサバティカルが現職校への割愛のためその機会を失ってしまったことにより、上記「研究方法」で提示した第二段階(頭韻詩の分析と脚韻詩の分析を統合し、中世の英語の韻律構造をより明確にし、頭韻詩と脚韻詩の対立、融合、そして変容発達していった過程を明らかにする)を本研究期間内に達成することができなかった。しかしながら、研究分担者と打合せを重ね、個々の研究成果に基づいた共著論文(仮題名: *The Reporting Verbs of Direct Speech in Medieval English Poetry: A Comparative*

Investigation into *Troilus and Criseyde* and *Sir Gawain and the Green Knight*) の執筆および学会発表を予定している。加えて、研究代表者は、現職校に着任して2年目となり、新しい職場にも慣れ、子供らも新しい生活環境や小学校に慣れ親しんできたため、今後は研究時間も確保できる状況が整ってきたと感じている。今後数年間のうちに、本研究およびそれ以前の研究成果をまとめた著書を出版したいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計 11 件)

中尾佳行、チョーサーの話法の意味論(2) 地の文の現在時制: Tr 5. 176-96、福山大学大学教育センター 大学教育論叢、第5号、2019年、pp. 3-22、査読無

中尾佳行、「トパス卿の話」の言語とスキーマの多次元構造 中尾(2018)再考、福山大学大学教育センター 大学教育論叢、第5号、2019年、pp. 101-16、査読無

井上典子、14世紀頭韻詩韻律研究の現況と展望、Language Studies: 小樽商科大学言語センター広報、26巻、2018年、pp. 3-13、査読無

中尾佳行、チョーサーの話法の意味論 『トロイラスとクリセイデ』における話法の多次元構造、福山大学大学教育センター 大学教育論叢、第4号、2018年、pp. 17-36、査読無

Hideshi Ohno, Akiyuki Jimura, Yoshiyuki Nakao, Noriyuki Kawano, and Kenichi Satoh, Textual Variations and Readings among the Manuscripts and Editions of The Canterbury Tales: With Special Reference to the Knight's Tale, 英語英文学研究、62巻、2018年、p. 1-13、査読有

Yoshiyuki Nakao, Review: Evur Happie & Glorious, ffor I Hafe at Will Grete Riches, English Linguistics, 2018, pp. 375-386、査読有

井上典子、14世紀頭韻詩における詩形・韻律と意味、小樽商科大学 人文研究、134巻、2017年、pp. 57-76、査読無

Noriko Inoue, The Metrical Role of -ly and -liche Adverbs and Adjectives in Middle English Alliterative Verse: the A-Verse, Modern Philology, 114, issue No. 4, 2017, pp. 773-792、査読有

Noriko Inoue, Hiatus and Elision in the Poems of the Alliterative Revival: -ly and -liche Suffixes, The Yearbook of Langland Studies, 30, 2016, pp. 75-105、査読有

中尾佳行、sweteの文脈と意味 Chaucerの「尼僧院長の話」の場合、福山大学大学教育センター 大学教育論叢、第3号、2016年、pp.1-15、査読無

中尾佳行、チョーサーの言語の身体性 「トパス卿の話」にみる<漸減化>の認知プロセス、JELS 33 (Papers from the Thirty-Third Conference November 21-22, 2015 and from the English International Spring Forum, The English Linguistic Society of Japan)、2016、pp. 93-99、査読有

### 〔学会発表〕(計 8 件)

中尾佳行、中英語韻文に見る話法の意味論 『トロイラスとクリセイデ』を中心に、英語話法に関する史的研究の課題と展望、近代英語協会第35回大会、2018年

中尾佳行、「トパス卿の話」の言語とスキーマの多次元構造、日本中世英語英文学会第34回全国大会、2018年

井上典子、14世紀頭韻詩韻律研究の現況と展望 『ガウエイン』詩人の作品を中心に、

日本中世英語英文学会 第33回全国大会、2017年

Yoshiyuki Nakao (ポスターセッション)、Chaucer's Language Embodied: Progressive Diminution in Sir Thopas、20th Biennial congress of the new Chaucer society (国際学会)、2016年

Yoshiyuki Nakao (シンポ organizer and chair)、4H Roundtable: Digital Approaches to Middle English Editing、20th Biennial congress of the new Chaucer society (国際学会)、2016年

中尾佳行、コミュニケーションの「ツール」を超えて：人文学的「知」からの問いかけ、第8回広島大学英語文化教育学会(招待講演)、2016年

中尾佳行、Ambiguity in Language 詩人チョーサーから英語教育を見通す、広島大学大学院教育学研究科、英語文化教育学講座(招待講演)、2016年

中尾佳行、チョーサーの言語の身体性 「トパス卿の話」にみる<漸減化>の認知プロセス、日本英語学会第33回大会、2015年

〔図書〕(計 12 件)

井上典子、14世紀頭韻詩人たちにとっての脚韻詩、吉野・山内両名誉教授記念論文集、春風社、2020年(出版予定)

中尾佳行、チョーサーの言語と認知 「トパス卿」の言語とスキーマの多次元構造、溪水社、2018、230

Yoshiyuki Nakao、The Semantics of Chaucer's speech/thought presentation in *Troilus and Criseyde*: The Emergence of conceptual blending、The Pleasure of English Language and Literature: A Festschrift for Akiyuki Jimura、Keisuisha、2018、pp. 241-60

Yoshiyuki Nakao、Chaucer's Comment Clauses with Reference to Trowe and Wene、Studies in Middle and Modern English: Historical Variation、Kaitakusha、2017、pp. 91-117

中尾佳行・地村彰之、『カンタベリー物語』の写本と刊本における言語と文体について、コーパスと英語文体、ひつじ書房、2016年、pp. 21-52

中尾佳行、英語の発達から英語学習の発達へ 法助動詞の第二言語スキーマ形成を巡って、これからの英語教育 英語史研究との対話、大阪洋書、2016年、pp. 55-88

Akiyuki Jimura、Yoshiyuki Nakao、Noriyuki Kawano、and Kenichi Satoh、A Computer-Assisted Textual Comparison among the Manuscripts and the Editions of The Canterbury tales: With Special Reference to Caxton's Editions、言葉でひろがる知性と感性の世界 英語・英語教育の新地平を探る、溪水社、2016年、pp. 68-85

中尾佳行、コミュニケーションの「ツール」を超えて 人文学的「知」からの問いかけ、言葉でひろがる知性と感性の世界 英語・英語教育の新地平を探る、溪水社、2016年、pp. 275-305

中尾佳行、チョーサーの『トロイラスとクリセイデ』における“assege” <包囲>(内、境界、外)の認知プロセスを探る、チョーサーと英米文学 河崎征俊教授退職記念論集、金星堂、2015年、pp. 379-58

Akiyuki Jimura・Yoshiyuki Nakao・Noriyuki Kawano・Kenichi Satoh、A Computer-Assisted Textual Comparison among the Manuscripts and the Editions of The Canterbury Tales:

With Special Reference to Caxton ' s Editions、中尾佳行先生ご退職記念 言葉で広がる知性と感性の世界 英語・英語教育の新地平を探る 、中尾佳行先生御退職記念事業会、広島大学中央図書館、2016年、pp. 67-84

中尾佳行、コミュニケーションの「ツール」を超えて 人文学的知からの問いかけ 、中尾佳行先生御退職記念 言葉で広がる知性と感性の世界 英語・英語教育の新地平を探る 、中尾佳行先生御退職記念事業会、広島大学中央図書館、2016年、pp. 276-306

小野章・中尾佳行・柿元麻理恵、O. Henry作 “ After Tweny Years ” の語り手と焦点化 英語教育における文学の可能性を求めて 、中尾佳行先生御退職記念 言葉で広がる知性と感性の世界 英語・英語教育の新地平を探る 、中尾佳行先生御退職記念事業会、広島大学中央図書館、2016年、pp. 31-45

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：中尾 佳行

ローマ字氏名：Nakao, Yoshiyuki

所属研究機関名：福山大学

部局名：大学教育センター

職名：教授

研究者番号(8桁): 10136153

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。